

[花き部門]

2. 樹皮を利用したリンドウのコンテナ栽培

[要約]

コンテナにヒノキとスギの混合樹皮を充填し「No.47 (おかやま夢りんどう早生1号)」を栽培したところ、定植4年目までの収量は慣行の土耕栽培と同程度であり連作が可能である。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 高冷地研究室

[連絡先] 電話0867-66-2043

[分類] 情報

[背景・ねらい]

リンドウは、連作障害が発生するため同一ほ場では改植できない。しかし、ハウスを利用した促成、半促成栽培や栽培条件の良い圃場では、連作の要望が強い。そこで、連作を可能にする栽培方法を確立するため、樹皮を利用した隔離床栽培を検討する。

[成果の内容・特徴]

1. 栽植密度は、樹皮を30L充填したコンテナ（幅40cm×奥行き60cm×高さ25cm）に6株定植する。（図1）。
2. 規格別収穫本数は、定植3年目で土耕区が隔離床区より若干多いが、2L規格は隔離床区が多い。定植2年目、4年目は隔離床区と土耕区で大きな差はない（図2）。
3. 切り花品質は、定植2年目、3年目で隔離床区と土耕区で大きな差はなく、定植4年目は隔離床区で土耕区より切り花重が重く、切り花長が長い。平均開花日は、隔離床区と土耕区で大きな差はない（表1）。
4. 定植4年目の収量が3年目より減少した原因は、1株あたりの茎数が減少したのではなく土耕区、隔離床区ともに規格外（花段数の減少等）が増加したためである。

[成果の活用面・留意点]

1. 施肥は、液肥（窒素濃度100ppm）または固形肥料（N:P₂O₅:K₂O=10:9:12（g/コンテナ））で行うが、樹皮が乾かないよう自動かん水設備でコンテナ下部から廃液（排水）が出るまで、給液（かん水）量と回数を調整する。
2. 定植4年目で収穫本数が減少したが、両区で減少しており樹皮の影響ではないと考えられるが、施肥方法についてさらに検討が必要である。
3. 定植5年目以降の収量への影響および品種間差は、継続調査する予定である。
4. 樹皮は、県内で購入可能なヒノキとスギが混合した粉碎樹皮を使用する。
5. 他の品種については、検討中である。

[具体的データ]



図1 コンテナ栽培風景

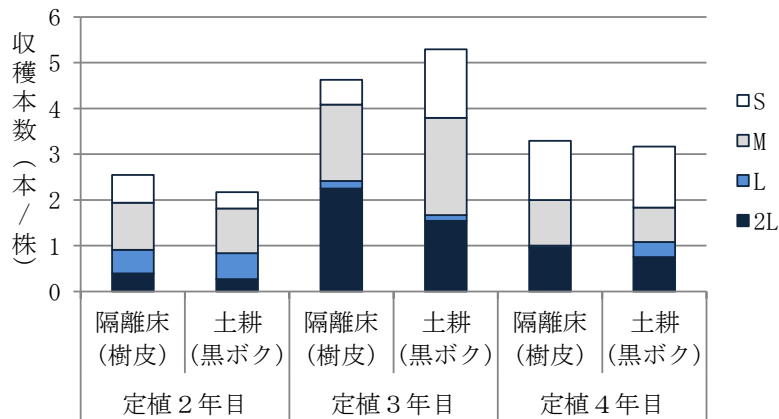


図2 隔離床栽培が規格別収量^zに及ぼす影響
^z 2L : 90cm 5段以上、L : 80cm 5段以上、M : 70cm 4段以上
 S : 60cm 3段以上

表1 隔離床栽培が開花及び切り花品質に及ぼす影響

定植後年数	試験区	平均開花日(月日)	切花重(g)	切り花長(cm)	莖径(mm)	花段数(段)	小花数(個)
2年目	隔離床(樹皮)	7月22日	28	80	3.3	4.7	20
	土耕(黒ボク)	7月24日	32	79	3.6	5.4	24
3年目	隔離床(樹皮)	8月5日	35	94	4.1	4.5	23
	土耕(黒ボク)	8月5日	33	99	3.9	4.2	19
4年目	隔離床(樹皮)	7月30日	37	98	3.8	3.8	17
	土耕(黒ボク)	7月31日	27	88	3.6	3.9	18

[その他]

研究課題名 : 1) オリジナルリンドウの連続出荷と新作型の開発
 2) 岡山県の気候に適したオリジナルリンドウの新品種育成による連続出荷体系の確立と栽培技術の改善

予算区分 : 県単

研究期間 : 1) 2007~2011年度、2) 2012~2016年度

研究担当者 : 藤本拓郎、森本泰史